

歴史における文学的教養 とその場

問題の位置づけと展望

白田雅之

インド諸語の文学に関心を抱き、その研究に携わる者が集まり、インド文学史の編纂にむけて努力を始めて数年がたつ。その間、2005年から隔年、本学会の全国大会において、科研費の交付をうけて進められている研究の成果の一部を発表してきた。2005年度の第18回大会では「南アジア研究へー文学からの問いかけー」、第20回大会では「19世紀の南アジア文学にみる作者の内面の揺れー変革期の多様性ー」をテーマに掲げた。インドの経済成長が著しい現在、南アジアを内面から歴史的に検討することの重要性をささやかながら提起しようと試みたのが、今回第22回大会のセッションである。

今回のテーマ「歴史における文学的教養とその場」は、前回、変革期としての19世紀における文学者の内面の揺れ——それは異なる文学伝統のせめぎあいの現われにほかならなかった——を検討したのを受け、近代語が姿を現わしてから後の四つの変革期を議論の俎上に乗せようとするものである。すなわち、インド文学史を叙述するときに、扇の要となる時期の文学状況を文学的教養の変化という視点から検討する。取り上げるのは次の四つの時期である。

① まず、9～13世紀、現在に繋がる言語が北インドで出現した時期を取り上げる。地方国家の成立、地方文化の展開、ジャーティの形成など、中世の確立する時代であり、現代南アジアの原型が姿を現わす時代でもある。この時期の東部インドにおける密教系の修行歌群と、サンスクリット文学の有終の美を飾るとともに「近代」語の文学との関係

が取り沙汰される『ギータゴーヴィンダ』に則して、この時期の文学状況が示唆的な指摘をまじえて生き生きと論じられる。密教的な修行歌と、のちのバクティ文献が、ともにラーガ《欲望》の肯定を伴う共通をもつが、社会へのかかわり方には大きな相違が認められるなど、文学史叙述にとって見逃せない視点が提出されている。

② 次に取り上げられるのは、17世紀後半の北インドの文学状況である。バクティ文学の帰着点ともいうべきトゥルシーダースの『ラーマの行いの湖』の背景にある文学的伝統が問題にされる。トゥルシーダースの詩句を引用しながら、その背景にある文学的伝統ないし教養が明らかにされる。この時代は近世の大帝国ムガル朝の形成期であり、中世的な文学的教養が近世的な教養へと組み換えられていく変容が論じられることになる。ムガル朝期における「ヒンドゥー」的文学教養とムスリムの文学教養の交錯など、興味ある重要な問題への橋掛かりになる考察である。

③ 19世紀後半、南アジアにおけるイギリス支配は安定期に入ると同時に、長期的にはインドからの撤退の過程が始まった。インド大反乱を契機に、インドは近世から近代へと転換したといえよう。文学に則していえば、19世紀前半まで支配的であった近世的文学教養が後景に退き、かわって英文学の素養が前面に大きく出てくるのが、この時期である。ここではその一例として、ムガル期に洗練され馥郁と花開いたウルドゥー文学が、どのような変容を強いられたかの問題が、パンジャブ協会（アンジュマネ・パンジャブ）の詩会と詩人ハーリーに焦点をあてて、詩型、内容、表現法から検討される。

パンジャブ協会の詩会を主催したのは、州公教育局局長ホルロイドであった点など、その関与のあり方が明らかにされれば、ウルドゥー文学と英文学という二つの文学伝統の遭遇の機微を解明する手掛かりになるのではなかろうか。インド諸語のそれぞれについて、この問題が追及され、Sisir Kumar Das, 1991, *A History of Indian Literature: 1800-1910: Western Impact: Indian Response*, Sahitya Akademi, New Delhi. の水準をこえた叙述を目指すことになる。一つのインド文学史を書くためにダースが用いたのは、各言語の専門家にアンケートを出すことであったが、アンケートの質問項目にあたる検討点の精度をさらに上げて、成果を持ち寄って議論することが要求されるだろう。

④ 最後に変革期として取り上げなければならないのは、経済成長の上げ潮に乗り活気づくとともに、グローバリゼーションの大波に揉まれている現在のインドである。ここで注目されるのが、南アジア系の人の手になる英語文学である。英米の文学賞の対象となる作品が、南アジア系の英語文学であることが珍しいことではなくなった昨今、国際的にもさまざまな観点から関心と呼んでいることは周知の事実である。私たちの関心からいえば、英語文学とインド諸語の文学の関係を通して、現在の南アジアが抱える、エリートと大衆、都市と農村の格差など数多くの問題を浮き彫りにすることが可能であろう。

このセッションでは、南アジア系英語文学隆盛の基礎を築きたいいわゆる「三大作家」の1人R・K・ナラーヤンがまず取り上げられ、英語文学の教養および流通のシステムが構築される場面が素描される。また、後半ではサルマン・ラシュディーが取り上げられ、地理的、文化的なボーダーをつぎつぎと乗り越えて展開される雑種的な文学の内包する問題が検討された。前半は英語文学の形成が論じられ、後半はその現在における状況が論じられ、セッションの課題に一つの明確な回答を与えるものであった。

セッションでは、ディスカッサントとして太田信宏氏（AA研）が立ち、発表では取り上げられなかった南インドの視点から歴史研究者としてのコメントをいただいた。文学史研のこれまでにない特徴は、文学研究が専門家だけではなく、歴史研究者を加え、より総合的に進められている点にあり、太田氏のコメントはその有効性を明らかにするものであった。

各報告はそれぞれの変革期における文学的教養の転換／変容の問題を現象的には素描することに成功しているように思われる。今後は、たとえば坂田報告の場合、トゥルシーダースがなぜ倫理的なスタンスをとったのかについての理解を深め、それが近世という時代とどう関わることが明らかにされていくならば、叙述がさらにダイナミックになるのではなかろうか。

本誌上では、最初の三つの報告をまとめていただいた。今日の英語文学については、質疑応答を通じて、考えなければならない多くの問題を抱えた重要な問題であることが確認された。しかし、今回は報告者の体調がすぐれないことから他日を期すことになった。文学史研では、南

アジアの英語文学研究者にも参加していただき、今後本格的な研究体制を構築していきたいと考えている。

うすだ まさゆき ●東海大学文学部特任教授